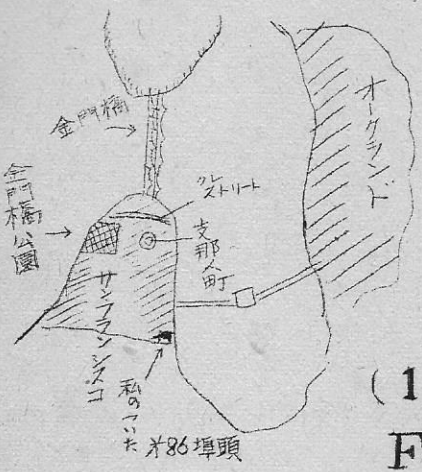
LEONTODO

1953 MARTO N-ro 5

ENHAVO

アメリカ航海の思い出	高橋達治	2p
ぐちーやらーがんもうーやら	山本昭二郎	5p
おもいで ------	アリマヨシハル	8p
Ĉu esp-isto povas esti kontraŭa al ESPERANTO?	el Heroldo de Esp.	9p
緑屋の歴史	朝日賀昇	11p
Vulpo sendita de Dio	股坂圭治	12p
合成語の単語化	千葉三郎	16p
Roko "ĈARANKE"		17p
Murmuro en iu tago	YASUKO KAYAMA	18p
Historio de Unu Patrino の研究	花園凡太郎	22p
Muĝo	HAYASAKA-Motoi	32p
サッポロだより	アリマヨシハル	33p
Postskribo ------		

カットは在東京のsamideano, s-ro Cukahara-Seiĉi が提供してくれた。



アメリカ航海の思い出

（日記から）

高橋達治

（1）

F-ino H.Wolff

シスコ入港作業が終って屋に帰ったとき、僕は一通の手紙を受取った。ロスアンゼルスのエスペランチスト、J、シェラー氏が僕の日本出発前に出した手紙に対する返事である。僕は全く欣喜雀躍の態でその封をひらいた。すると中に封筒が一枚（返信用）紙幣が1ドル入っている。

親愛なる同志　高橋君

私は君の11月23日付の手紙を受取りました。それによると君は12月13日にロス港に到着するのですね。その日の晩、私達は町で会食をやってザメンホフ誕生祭を祝うことになって居ります。ですから、その土曜日（13日）、君が私達の会合に間に合うヤウに早く私の家においでになることを希望致します。

それが出来なくとも、どうぞ私達の家で泊りなさい。きっと他の同志も君を迎えることを望むでせう。けれども私は君がどれだけの期間私達の町にいるのかを知りたいのです。私達はそれによって若干準備も致すでせうから。時々同志はやってくるのですが、どれだけの間町にいるのかわからないものですから準備も出来ないでしまうのです。

サン、ペドロ駅から街の中心までくる"赤電車"があります。恐らく君の船はその駅の近くにつくでせうが、"港町"にある駅に船からゆくためにはハイヤーをつかわねばならないでせう。どの電車にサン、ペドロから乗るか分りましたら、すぐにロスの私に電話して下さい。（OL5103番です）そうすれば私は、君が一時間十分も乗車して来た後に間にあう様、ロスの駅で待っているでせう。ロスの駅から10分後にはホリウッドの私の家に着くことになります。

けれどもシャールス・ショメッテーさん一家（一家中が家庭ではエスペラントだけで話をします）が君の船まで行って待って下さると思います。困ったことに船の到着時刻がわからないために一日中待たねばならぬことになりかねません。私達はロスでいろいろ知るようにつとめますが、サンフランシスコでできるだけ私に知らせて下さい。しかし、誰も船に行かなかったら、必らず前にのべたようにして下さい。

サンフランシスコに着いたらすぐ使うことが出来るように航空郵便封筒と、それから金を

1ドルいれておきます。お金は、君の船で米貨を貰えないというような事があるかも知れませんから。　電車賃が58セント、バス賃が15セントです。サン・ペドロから電話をかけるのにお金を拵うことができぬときは　Reverse the charge といえばよいのです。　ショメッテーさんの電話は CR57890 ですが、それは私が家に居なかったり、誰も船に来なかったりしたときにかけることです。

心から　君の　　ヨセフ・R. シェラー

熱いものが胸の底からこみあげてくるのを感じた。何という厚い友情であろう。何というこまかな心づくしであろう。偉大な言語エスペラント、それは嘗も、一片の木片の岸に漂う如くにして、異郷に流れついた僕にさえ、斯く、大きな人生の歓喜を与えるものであった。

何よりも重大な事は、氏が13日に僕を終日まつということであった。僕が13日到着と手紙に記したのに、船の進航は予定より遅れ、15日ロス到着となったのだから。最も早い道は電話をかけることであった。けれども僕は日本に居るときでも電話をかけるのが嫌いであったのに、まして様子のわからぬアメリカなどで、自信のない言葉で電話することは臆劫であった。しかも、12日、夜の町を歩いて、適当な市外電話をかけれるところを見出せなかったので、僕はどうしてもH. ウォルフさんに此を依頼しなければならないと思った。

埠頭上屋の中に事務所があり、そのそばに電話箱がある。僕がそれに近づくと守衛がやって来て、電話なら私がかけてやる、というので電話番號をみせてよろしく頼う。彼のよくなれた取次で事務室内の電話から、僕はすぐに H. ウォルフさんの声を聞くことが出来た。明日会えるであろうということでシェラー氏に伝えてほしいこと、いろいろ話した。時々大きく、Ja!　というドイツ語風な発音が入るのでちょっと面喰った。けれども何という楽しさであろう。傍に立っている守衛が僕の笑い乍らしゃべる様子をみて、にこにこしている。だが私達は何の一面識もないのに、斯うして久しぶりに会う友達のように語り、そしてロスまで電話をかけてくれなどと勝手なことを頼い得るのだ。"Gis, revido!"（さようなら）といって電話をきってから、僕は僕自身でそのことを不思議に思った程である。守衛が別れるときに郵船名入りの灰皿はないかというので、船に帰って探したが見当らず、仕方なしにクリスマスカード（日本の）をやったら、"You are clever boy."（お前は賢こい）といってほめてくれた。序いでながらとシスコ案内図を彼から買ったのだが、この時事務室にいた酒のみのステベが二人僕等に話しかけた。それ故、僕がサンフランシスコについて、三聞いた後、サンペドロからホリウッドまでどれだけあるかと尋ねたのだが、一人が七十哩だと答え、一人が八十哩だと答え、そのために一時間以上の議論をした。酒を飲んだ上だと守衛が言ったが、アメリカ人の気質を示すのに十分であろう。一時間も彼等の議論をきいて怠屈したが快よかった。

朝霧がはれると、13日の空はかなりすっきりとしたものだった。H. ウォルフ嬢のところにゆきたいと思ったので朝から落着かなかったのだが斯う晴れ上ると矢も楯もたまらなくなる。但し、コプラの荷役中で忙しい船員達のことを考えるとやはり具合が悪かった。折も折である。一等航海士を深しているステベ風の男がいたから彼を案内してやったのだが、その際、clay ストリートはどこかと聞いた。（僕は kurei strit と発音したらしい）最初はわからぬ様子であったが、Klei ストリートならあとでハイヤーで連れていってやるというのですっかり喜んだ。

別してみなりがすばらしい、とか、地位の高さを示すという人でもないが、この人が僕を乗せてくれた自動車は日本では最優秀の部類に属するものであった。才三大通りから、エムバカデル

通りに抜けて、フェリー（連絡船）の駅の近くで、彼は、ここがクレー街だから降りてゆけというのだが、その時の英語が幾分癖に落ちず、彼女の家は近いのかと聞いたら、私は忙しいから他のハイヤーで真直にこのストリートを上って行けという。仕方なしに下りようとしたら、彼は再び思い直したように自動車を動かして坂を上っていった。幾重にも丘があってその起伏をする毎にクッションの良すぎる自動車では僕の体が宙に浮くようでよい気持はしなかった。まだ彼女の家がわからないこと、彼女とうまく応待できるかという不安、それに、この街路はシスコを東西に連ねる街路で非常に遠く、僕のためにトラブルされたこの人の不快を考えて僕も幾分不快の念におそわれた。I am sorry　　というが、全く気の毒であった。やがて2900番地ブルックに来て、家に注意していると、白い壁のアパート風の家があって2940から僕の探している2944までの数字が黒く、かなり大きくかかれていた。自動車はとまる、礼をのべる間もなく自動車は動き、僕は彼女の家の前に立った。すぐ玄関の傍の部屋からバイオリンの音が聞えていた。横のおしたベルでいそいそと玄関にあらわれ、ドアをあけてくれた。でっぷり肥えたお婆さんが"Bonan Tagon"（今日は）と叫んで僕の手をとった。ウオルフさんだ。続いて"グド、モーニング"と挨拶した女の人は、彼女の妹だと紹介された。"Mi estas tre ĝoja, vidi vin"　――　（お目にかかれて幸いです）といい、ハウ、ドゥ、ドゥと辞儀しながら、握手しながらも僕は、その一瞬の彼女等のほゝえみによって、今まで被いかくされていたアメリカ人と日本人、という対立観念が完全に拭いさられ、忽ち一足とびにおばさんかなんぞの前に立ったような親近感を感じてしまった。彼女のエスペラント経歴は随分古いものらしい。1940年の世界エスペラント大会に出席したという。その時のサインブックを見せてくれた。外人の書いたサインの文字などというものはわからないものである。唯、日本人宮本新治氏の書いたサインは日本人の僕にはわかり易かった。サインをしろというので、宮本新治氏の次の頁に感謝の一語を誌し、その次に Mi kredas gloron de D-ro Zamenhof per vi! antaŭ naskiĝitagon de Zamenhof '52（私はあなたによってザメンホフの偉大を信ずる。1952年ザメンホフ誕生祭前日）を誌しておいた。

彼女はエスペラントの教師を、それから彼女の妹は音楽教師をやって生活もしているらしい。彼女達の部屋は三つあり、一つは姉の室、一つは妹の室、他はパントリか何かになっているらしい。この室は私の寝室で、書斎で、食堂で、居室である、という、そういえば僕が入ってきたときに、ちょっとそこで待てといってその室を寝室から応接室に切り換えるために大分忙がしく働かれたようである。やはり、Jes! と大声でいわれることと、r の発音が僕等日本人の常習と違うということで少々困ったが、大抵の意味は通じ、彼女のユーモラスな態度が僕の心を軽快にして僕達は大いに語り愉快だった。僕が余り大声で笑うので隣の音楽教室から文句が出てしまった。それで私達は街と公園を見物にゆくことにした。

晴れて暖かであった。ウオルフ嬢は、時々道傍で遊ぶ子供達に愛嬌をふりまいたりしながら愉快そうに歩いた。カリフオルニヤストリートの街角でケーブルの来るのを待った。私達が愉快そうに話をしていると、美しい妙齢の婦人がけげんな面持で私を見ている。それをウオルフ嬢はのがさず「あゝ、お嬢さん。この人は日本人で昨日ここに着いたのですよ。私達はエスペラントで話をしているのです」　ウオルフ嬢の胸の緑星章はこの時カリフオルニヤの太陽に映じて輝くばかりであった。僕が婦人に挨拶し話しかけると、Jes のかわりに極めて上品に「ハイ」と答える。横須賀に住んでいたことがあったのだそうである。もう少し話したいと思ったがケーブルが来た。ケーブル・カーは、この町独特のものである。坂が多く、普通の電車ではうまく動かない。

→ P.15

ぐちーやらーがんもうーやら

S. YAMAMOTO

私がエスペラントを知り、その学習をはじめてからもう4年にもなる。私は同志と会って屢々"エスペラントを何年おやりですか？"ときかれるが、そのたびに即答出来ず、指を折っては、三年かな？四年かな？と自信のない返事をしてきた。そんなあいまいな返事をする気持は案外きまりわるさもあるらしい。つまり、四年間も学習してきて、みっちり一年間やった程度も覚えていない様な気がするので三年位と割引して答えとく。才能ある人にはエスペラントをマスターすることは比較的に容易なのだろうが、私の場合、別にそれらしい才能など自覚されないし、記憶力もさしたる事はない方だから萬事に無理は出来ないのである。でも、私にも意を強く出来ることだってある。たとへば、まがりなりにも四年間続けてきたということ、つまり、この四年間の実績が、一年間で私を凌駕する様な人達にひけをとらせないだけのあるものを私にもたらしてくれたということである。

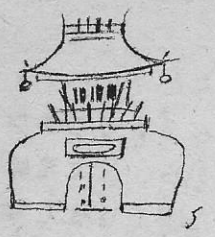
エスペランチスト達にエスペラントの魅力はどこか、ときいたら、いろいろな返事がきかれるにちがいない。私がアンケートされたら私はこう答えるだろう。"自分の考えを自分の表現でかけるから"。四年前、私がエスペラントを学ぼうと思った時、私はそこに魅力をかんじた。そして今でもそれは変らない。でも、こうしてやってきてみると、私が大分思いちがいをしていたこともすくなくない。エスペラント文は、やはり、外国人（ヨーロッパ人）に分ることが第一の要諦とされている。つまり、あちら風の考え方、書き方が必要なので、西洋の風俗、習慣、感情、情操に到るまでを知悉していなくては、まず完全な文章は書けないのである。ただ、一流のエスペランチスト達のスタイルの模倣によってのみ比較的初学者である私達は差当りの文章を書くことが出来るのである。今から5年程前、私は英語を懸命に勉強していた。その頃使っていた参考書に「日本人で英文を自由に書ける者は極めて少ない」とあって、とても私をおどろかした。たしかに私達に書くことは難かしい。読むことや聞くことはかなりの程度出来ても、書くことや話すこととなるとからっきしだめなのである。八千萬もの人間のうちの、小学校卒業以上の教育ある人間のほとんどが、過去、或は現在、英語の教育をうけ、またうけつつありながら、ぎくしゃくとした模倣文しか書けない（或は全然書けない）ということは何という残念なことであろう。どうせ勉強するからには書ける様にならなくちゃほんものではない。私はそう思って英作文も勉強した。ところがどの作文の本にも、模範的な作文は模倣なり。百点とりたかったらひたすら模倣せよ、とある。私はまねなんていやだったが、英文を書けたらいいなと思って、ともかくいくらか覚えた。そんなふうにして作文を覚えても実際に使う機会などあろうと思えなかったし、学生の

様に試験でもあるとはげみにもなっただろうが、ひとりっぽちの勉強でみてくれる人とてなかったので、例にもれずいいかげんなところで作文はやめにしてしまった。せっかく覚えても使う機会がないのでやがて忘却してゆく。それでもせっせと単語や構文を暗記していた当時の学習がとてもなつかしい。学校にもはいれず、就職も出来ず、世間的立身出世はとてものぞめぬ窓の私であったのに、何であの様にひたむきに研学したのか、今の私にはとても考えることが出来ない。　ともあれ、私がエスペラント学習以前にいくらか英語を学び外国語の学習の困難さをしみじみと経験したことは、その後エスペラントを紹介されて私がその文法の平易、高い実用価値などをすぐに理解するのを容易にしたのはもちろんである。　理解は直ちに支持となり、やがて私自身も学習をはじめた。〝自分で自由にエスペラントで書くことが出来る〟という文句は、エスペラント宣伝に屢々使われるが、私も或はこの殺し文句にころりとなったのかも知れない。日本語ではいきなり目的格がくるが、英語や、その他たいていの外国語にはそんなものはない。ただエスペラントにだけはあるらしい。それも日本語とは全く同じとはいえない。たとえば Vin batos.（打つぞ、お前を。）と、Batos vin.（お前を打つよ。）と比較すると、前者の方が後者より意味が強い。つまりすごい文句なのである。同じでんで、文章の中の各句の目的格を全部日本式に述語の前に置いたら、それこそ〝すごい文章〟になる。この文法上の約束を知らないで、或は無視して、ただ単語を日本式に羅列していったら、あちらの人はそれを読んで何と思うだろう。ヤパンは野蛮である、と思うだろう。事実、私達がそれと知らずに、手紙などでうっかり日本流の書き方、考え方をして、彼等ヨーロッパ人をしてあきれさせていることも多いかも知れないのである。私達日本人のエスペラント文は概して独善的なものが多い様である。日本人にだけわかるエスペラントでは困る。しかし、文法的に正しくとも機械的文章、非個性的文章、ユーモアのない文章は読む人に何の印象も感興も与えないだろう。私はこの頃しばしばそんな文章をヨーロッパからの手紙にも見る。ヨーロッパ人必らずしも練達の文章家ではなく、必らずしもユーモリストではなく、必らずしも個性的であるとは思われない。私がこうして文通によって彼等を観察する様に、彼等ももしかすると私達以上に鋭利な観察眼を働らかして私達からの手紙を仔細に読んで、そこからなにもかもその長い鼻と鋭いきゅうかくでかぎだして、「日本人の　とくにエスペランチストの教養程度はかくかくしかじか」と評価しているかも知れないのである。なんとうす気味わるいことではないか。自分の言いたいことを正確に云う或は書く、ということは迚もむづかしい。まして人間的魅力、人柄の反映を手紙を読む者に感じさせるということは一層むづかしい。だが、そこまでゆくことが絶対に必要だと思う。エスペラントや英語による外国との文通は国際的なものであるから、日本人としてのきょうぢも忘れてはならないし、たえず研学しなくては、五年たっても、十年たっても相も変らぬたどたどしい文章で相手にもあきれられ、又あきられるだろう。漫然とやっていても上達はしない。何とかしなければならぬという私のこの焦躁、エスペランチストなら誰しも共感してくれると思う。

生きたる言語を会得する一番の方法はその国で呼吸してみることだ。せめて雰囲気にひたる機会をたくさんもつことだ。英語にたんのうになりたかったらアメリカに出かけて皿洗いでもするに限る。(それも電気皿洗機に駆逐されるまでのはなし)これがエスペラントの場合、エスペラント国など形而上の国だから、そこえ出かけていって皿洗いをするわけにはいかない。だいいち、エスペラントでは食えないのだから。現在、私達がエスペラントに練達する唯一の方途、そして実際に効果ある方法は、作文したり話したりすることよりも多読することである。私達の読書量はおしなべてお話にならない程少ない。むしろ、ほとんど読んでないといっていい程である。読む本がないので、などという人は皆無で、口をひらくと「忙がしくて」とか「心的餘裕がなくて」という。読むこと少なくしてなお書こうということは、木によりて魚を求むると一般である。沢山読むこと、これを今年のスローガンとしたい。読書するということは食べることだ。作文するということは仂らくことだ。そして文法は規律、節制、鍛練ということになろうか。食べないで仂いたり哺乳したりすると母体は疲れ、意気沮喪し、健康は損なわれてゆくだろう。だから、ふだんから充分読書して力をたくわえなければならない。作文するということはむづかしいことだが習慣にすれば割に楽に書ける様になると思うし、又思いたい。これば かりは上手になってから書いてみるというわけにはいかない。創作力のある時期に創作することをしなかったら、芽はかれてしまうだろう。創作力というものは、概して若い血気の時代にこそ一番あるので、この時期に何一つ書けずじまいだったら、あとあとになっていくら悔いても遅いつかない。エスペラントも、上達してから、といっていたら時期を失することが多い。だから、現在習得してしまったテクニックを駆使して、どしどし書いてみることは必要である。練達堪能の人達からみればちゃんちゃらおかしいものとみえるかも知れない。だが一念は岩をもぬくのである。ここに一人絵の下手な人が絵が好きで絵を書いたとする。意地の悪い人も多いから、「目ざわりだ、絵を書くなんて柄ではない、やめろ。」というだろう。そして、くさされて悲観してやめる人がある「自分には才能がない」といかにもさびしそうに。このどちらも島国根性の持主である。 餌をつけないで釣糸をたれていたという大公望を私は理解出来ないが、理解出来なくたって、魚が釣れなくたって私はおせっかいはするまいと思う。私も年をとってかしこくなり、或はばかになったら、そんなこともするかも知れないのだから。

(この小文はタイトルの示す様に、私のとりとめのない愚癡やら、願望やらを書き散らすのが目的である。スペースをふさぐ、という意味もある。しかし、これで私はかなり苦心して書いているのである。)

(1957. Februaro. 20)



おもいで……

サッポロ アリマ.ヨシハル

1. Esperanto の知り初め

昭和の初めのある日、母校の鉄嶺高等小学校（在満州）から校友会雑誌"櫻草"が届いた。よろこんで開封してみてフンガイした。というのは、表紙の中央に LA PRIMOLO と書いてその周囲に LA ORGANO DE TIEH-LING ELEMENTA LERNEJO といった風に外国語で意匠されていたからでした。わたしは日頃ニッポン人が無批判に英語を使い過ぎることを悲しく思い、学生時代から英語廃止論を新聞や雑誌に発表していたので、"LA"なんてフランス語か何語か知れない外国語で意匠された、それも語学雑誌ならいざ知らず小学校の機関誌の表紙の文字として図案されたことに心からフンガイしたわけでした。さっそく校友会の幹事長宛にコウギ文を出しました。ところが、4～5日後に巻紙に毛筆で長々と書いて、表紙のコトバはフランス語でも英語でもないこと、これは世界中立の共通語で Esperanto という国際語であること、英語廃止を唱える貴君こそ率先してこのコトバを学ぶべきであること等を前置して、文法を一とおり述べ、表紙のコトバを分解して説明した返事が来たので、そのときに初めて Esperanto という国際語のあることを知ったのでした。それから 2～3ヶ月をへた秋のある日に、大連エスペラント会主催の Esperanto 短期講習会が初められることを知ってさっそく会費一円を添えて申込みました。当時の申込者は初めの予想の倍以上で 200 名余りになり、主催者はうれしい悲鳴をあげたとのことでした。ところが講習会が終る頃には数えるほどしか残らず、最後に大連エス会の会員として入会したのは現在浜松におられる s-ro 北尾荒男と私とのたった二人きりでした。その後もよく kurso を開いたようでしたが、殆んど残る者はありませんでした。それで Esperanto の講習会では残らない方が普通で残るのは奇蹟なのだといってはあきらめなぐさめ合ったものです。

2. 甘いからい Esperanto

大連南満工業の学生時代、英語・シナ語・ドイツ語を正課として学ぶ身に、もう一つ Esperanto を勉強するのはムリだったのでなかなか学習は進みませんでした。だがカナモジカイ会員であり、日本ローマ字会の会員でもあり、当時大連エス会の委員であった s-ro KUROZUMI-Tuneta から強制指導されつつ初等講習もろくろく終らないうちに中等講習に参加させられて、一方 s-ro ISIGURO-Yosimi 著の独習書で勉強したのですがいつも分詞接尾辞のところで足ぶみし、行きつ、戻りつしていました。こうして、分ったような分らないような勉強をし

ている頃に第何
参加したのでし
生まれて初め
て始まるのを待
Esperanto が
すると会長の口
…… 」という
た。 Esperan
て丁度甘からセ
しましたが口早
ませんでした。
ア」は"Ama
た。このEsper
一つ何か Esper
ンデモない決心
がおこなった演
よく判らない文
かかり引っか
どうか、文にな
暴さを振り返っ
で勉強を続けた
ず、文も書けな
知れません。

なり以前私
いるのをきいた。
私達がこの碑の信
となのだというこ
者は非エスペラ
とえそのエスペラ
そんじょそこいらの連中

ている頃に幾何回目かの満州エスペラント大会が開かれることになって私もそれに参加したのでした。

生まれて初めてみるEsperanto大会がどんなものであるか大きな期待をもって始まるのを待っていました。時間が来て会長のアイサツが始まりました。会長のEsperantoがどの程度私にわかるだろうかと話の流れ出る口を見守っていました。すると会長の口からとび出した最初のコトバは "甘い、からい、ゲサミデア……" ということばでした。それを聞いて私はすっかりめんくらってもまいました。Esperantoってなんておもしろいコトバだろう。甘いからい、なんて言って丁度甘からセンベイ見たいなもんだなと感心して、そのあとのコトバを聞こうとしましたが口早に話されるので、ただestasだけがわかったきりで何もわかりませんでした。その後勉強が進んで、かっての大会に聞いた"甘いからいゲサミデア"は"Amataj karaj gesamideanoj"であったことがわかりました。このEsperantista Kongresoに参列するようにすすめられて、では、一つ何かEsperantoでシャベッてやろうと、estasしか判らないくせにトンデモない決心をして、1905年第1回萬国大会でD-ro L.L.Zamenhofがおこなった演説の初めの部分から取ったり、会話の本から集めたりして自分にもよく判らない文章をでっちあげて、暗記し、大会の席上で思い出し思い出し、引っかかり引っかゝり、本を読むようにシャベりました。もちろん、聞手に判ったかどうか、文になっていたのかそんなことなんか考えもしないで……。当時の無暴さを振り返って見ると顔が赤くなります。もかし、あのときの大胆さ、熱心さで勉強を続けたならば、二昔後のいまだにろくろくEsperantoでの会話もできず、文も書けないようなとんでもないEsperantistoにはならなかったかも知れません。

読者の声（但し、Heroldo de Esperantoの）

Ĉu esperantisto povas esti Kontraŭa al Esperanto?

（いやしくもエスペランチストたる者がエスペラントに否定的であっていいものであろうか？）

かなり以前私がゼノアに住んでいた時、私は屢々町の人達が次の様な噂をしているのをきいた。「誰が港を荒廃させるかといえば当の船乗り達さ」そしてもしも私達がこの噂の信憑性をたしかめたなら、これが奇論でもなんでもなく、実際のことなのだということが分るだろう。エスペラントの場合も、エスペラントの真の妨害者は非エスペランチストではなく、むしろエスペランチスト自身なのである。たとえそのエスペランチストがいわゆる ĝisrevidulo（ありきたりの、按摩師は出来るというそんじょそこいらの連中という意味か？）であろうと、eminentulo（大家達）であろうと同じ

こと。次にかかげる実例が私のこの意見が正しいことを雄辯に物語ってくれるだろう。

数ケ月前、同志のオランダ人が観光旅行の道すがらミラノにも二日間滞在した。（私はその人の名前については沈黙したい。何故って、私の関心事はその人にあるのではなく、その人の無節操にあるのだから。）当然のことだが、彼も、その土地での宿泊や見物の便宜をはかってもらうために、その土地土地の U.E.A. deligito（国際エスペラント協会委員）を廻ってあるいていた。だが、ミラノの委員は暇がなかったので彼を私の方に廻してよこした。それで私は、私の家から近くて、小さくとも恰好な宿屋で、しかも彼のためには宿泊料の比較的安い清潔な室を見つけることにつとめた。

翌朝、私は彼を街に伴った。そして、彼の言うがまゝに彼を旅客案内所に連れていった。彼は帰国するために切符を買おうと思ったのである。彼はそこの事務員に向って私には全くの外国語で、つまりドイツ語で言いはじめたのを私は唖然としてきいた。彼は自分がエスペランチストであるということをてんで念頭においていなかった。その時から私の眼には彼が変な理解し難い外国人に見えてきた。

私達が旅客案内所から出た時、私は、「エスペラントは何にも役立たぬ」とか、「エスペラントは誰にも、どこででも話されてはいない」などという非エスペランチスト達の愚かしい風評を裏書することになってしまうその彼の許し難い不可解の行為のために、彼を非難するのに自分を制することが出来なかった。

エスペラントを生きた言語として役立てようと思う良心的エスペランチスト達は次のことを綱領としてもらいたい。すなわち「エスペランチストたる者は外国に行ってその国の〝エスペラント通訳者〟に付添われたり助けてもらったりする機会がある時、たとえその人が訪れている国の言語をよく知っていても、私用にばかりではなく、とくに公共機関の事務所などでもエスペラントだけを使うことがエスペランチストとして道徳上義務づけられているということを考えなければならぬ」さもなければ私は外国の同志達にはっきりとまじめに勧告したい。そんな同志なら、旅行の便宜のために地方のエスペランチストを訪ねるべきではなく、まっすぐに同国人か通訳のたくさんいるところにゆくか、それとも、今はこの文明の国のどんなちっぽけな町にさえもある様になった旅客案内所にゆくべきである、と。

心あるエスペランチストにならわかってもらえるだろう。そしてエスペランチストのために協力してくれるだろう。

Q. G.

（Tradukita de S-ro YAMAMOTO. 1953. 2. 25）

◎ この一文は Heroldo de Esperanto N-ro 1169（1952年12月1日附）の〝読者の声〟の中の一つで、いろいろと教えられるものがある様に思われるので紹介することにした。

緑星の由来 (1)

朝日賀昇(訳)

Brazila Esperantisto (sep～okt /1952 号) の p.6 に A.Caetano Countinho が Pri la deveno de la verda koloro, la stelo de Esp. k. la unua esp-ista insigno と題して興味ある記事をのせているので紹介したいと思う。以下抄訳を掲げる。

月刊誌 Esperantisto N-ro 3 (39) Jaro IV (15/Mar/1893) p.47 に、緑と星に関する最初の記事が見える。《「我々の文献の凡ての表紙に、亦我々の事業に触れる凡てに緑色を使い、上に星をつけよう」と s-ro L de Beaufront (ボーフロン) が云って来た。そうすれば星を伴った緑の色 (espero, esperanto の二つのシンボル) は我々の仕事の一定な外部的しるしになり、我々に属する凡てを直ちに認められるだろう。我々はこの思いつきに本当に賛成し、私は私が出す凡ての書物に今後それを使おうと思う。我々は我が出版者友人諸君にも同様にされる様提案する。》—(ザメンホフが書いたもの)

才二の記事は N-ro 6 (42) Jaro IV (15/Jun./1893) P.84 にある。「我々の事業に対するしるしとしての星に関する s-ro ボーフロンの提案は絶賛を受けた。我々の凡ての文通者達は、これが我々に最適のしるしであることに意見が一致し、このしるしに関する色々な細かい事を提案して来た。s-ro G. Rjabinin は、皆が望む金属の中央に小星を伴った直径2～3センチの小円で、星は緑のバックの上になければならぬ。それをつける方法や場所は、各々勝手でよい。s-ro P. Deullin は、使用者の好みに従って、どんな材料でもよい簡単な星形がよい。"Ligo ESPERANTISTA" 或は "ESPERANTISTO" を浮かせて、どこにでもつけてよい。なぜなら、殆ど凡ての人は緑と星に賛成しているし、既に永く多くの友人が Esperantisto とゆう表現を自分のスタンプに使っているので、我々の事業の決定的サインは、緑・星・Esperanto 或は Esperantisto の三つに段々なると思うからである。と提案している。この三つを互に如何にまとめ、どんな形、どんな場所に用いるかなどの細かいことは夫々の好みにまかせよう。これも亦時と使用が一定の何かを産みだすと思う」

(daŭrigota)

正誤表

4p. 8行目　I am sorry… の次に I trouble you. がくる。

Vulpo sendita de Dio

ŬAKISAKA-KEIĴI

S nervejo de valo de iu monto, vivis maljuna vulpo, kiu estis respektata de ĉiuj : simio, lupo, leporo, cervo kaj aliaj, ankau kiuj same vivis tie. La vulpo estis tre saĝa, sed ankaŭ tre ruza, pli ol tiuj, kiujn oni trovus malofte en la homa mondo. La vulpo estis ĉiam kun Dio kaj kuŝis senlabore ĉiutage en kapelo. oni nomis lin "La vulpo servanta al Dio". Se la vulpo havus al si taskon, ĝi estis nur tio ke, kiam li havos al si ian neceson, li al-vokas ĉiujn kredantojn antas sia kapelo kaj predikas.

"Vi prenu vin energie en via tasko. Vi ne tromu reciproke unu la alian. Vi amu kaj kredu reciproke alian."

Kaj la vulpo aldonis plue kun serioza mieno :

"Vi ne mortigu ĉiujn vivaĵojn, ĉar tiuj ankaŭ vivas en favoro de Dio."

Tial ĉiuj laboris kun sia tuta energio. Ĉiuj ne trompis reciproke unu la alian. Ĉiuj amis kaj kredis reciproke alian kaj ĉiuj mortigis nenian vivaĵon. Sed supozu, ho, kiel ili do nutras sin mem !

Estis somero ! Jen sur la herbejo kaj la monteto jam tre dense kreskis : herboj, arboj kaj aliaj. La valoj aspektis tre feliĉaj. Jen sur la herbejo la leporoj saltis kaj saltis ĝojplene, ĉar la herboj tute verdigitaj afable akceptis ilin. Sed kiaj malfeliĉaj estas lupo, urso, leono, cervo kaj aliaj grandaj bestoj! Ĉar ili nur rigardas tiel gajajn kaj bongustajn leporojn kaj iliaj stomakoj nun estas tute satigitaj por la

rigardo. Ili estis tre fidelaj, nun ankoraŭ kredas sin al la vulpa prediko-----, Ili ĉiutage nur rigardis vane leporojn kun sonoj en sia gorĝo.

Baldaŭ aŭtuno venis. La multaj rikoltoj: grenoj, kaŝtanoj, herbaĵoj kaj aliaj bongustaj nutraĵoj, kiujn ili kolektis kun granda peno dum printempo kaj somero, nun staris antaŭ ili tiom alte kiom monto.

Iun tagon, la vulpo vidis ilin kaj pensis:

"Estas jam pretigita."

Kaj la vulpo alvokis ĉiujn kaj predikis:

"Devas esti tre benite, sinjoroj, ke dank' al favoro de Dio, vi finlaboris sendanĝere. Jen vidu! Vi jam rikoltis tiom da grenoj, vi do nun ne forgesu vin al la favoro de Dio."

Tial ĉiuj kriis en unuiga vorto:

"Ho, mia Dio!" kaj klinis malsupren al tero sian kapon. La vulpo fiksis sian rigardon al ili kaj murmuris en sia buŝo; "Mi devas jam komenci." La vulp ankaŭ predikis al ĉiuj: "Tio estas tre bona, sinjoroj. Dio nun ricevos vin afable. Tial vi ankaŭ devas oferi vin al la favoro de Dio. Plej bona estas tio, ke vi oferu al Dio la trionon da grejnoj el viaj rikoltoj. Dio kredeble ricevos ilin."

Ĉiuj do alporti al la vulpo tronon da grejnoj kredante la vorton de Dio. La vulpo vidis ilin kaj diris denove:

"Vi prenis vin en bona farado. Dio baldaŭ donos al vi pli grandan favoron", kaj la vulpo ekvidis ilin kaj li pensis ke ili ankoraŭ ne dubas lin same kiel Dion. Li do daŭris sin: "sed ĉu vi bone scias ke la leporo estas kreita en la amo de Dio? Li nun havas grandan kompation al la leporo, ĉar la vintro

baldaŭ atakos ilin severe por tia malvarmo. Li do volas alvoki ĉe sia loko. Se vi komprenos, do alportu ilin laŭ la volo de Dio !"

Jam estis la komenco de la vintro. Ĉiuj obeis kaj alportis ĉe Li tiel grandan kaj blankajn leporojn de tie kaj ĉi tie, kaj ilin oferis al la servanta vulpo. La vulpo ilin vidis kaj diris kun granda ĝojo :

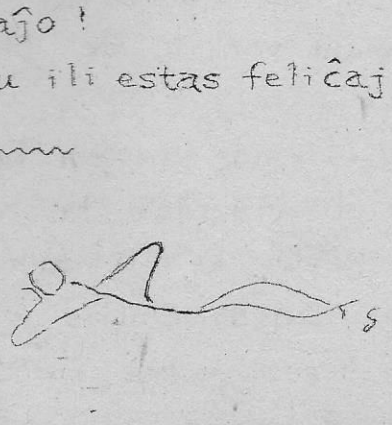
"Tio estas tre bona, sinjoroj". kaj la vulpo klinis supren al la ĉielo sian vizaĝon metante sur la bruston siajn manojn, kaj plue kriis : "Ho, Dio ! Vian favoron sur ili !"

Kaj la vulpo iris en la kapelon, kunportante la leporojn kun multaj rikoltaĵoj, kiujn ili alportis ĉe la kapelo. Jam falis neĝo de sur la ĉielo. Ekstere estis tre malvarme. La vulpo nun senfelis la haŭton de l' leporoj, kaj ilin la vulpo prenis kiel tapiŝon kaj ankaŭ viandon kiel manĝaĵon. Kredeble la vulpo sufiĉe nutros per ili sin mem dum longa vintro. La vulpo ankaŭ starigis ĉe la muro alte en la ĉambro la rikoltojn kiel monton.

La vintro nun tute profundiĝis : neĝo dense etendiĝis sur la herbejo de la valo, kaj vento severe blovis tie. Sed kie dum tia malvarma tempo la fidelaj bestoj nun estas ! Kiel ili vivas dum longa vintro sen viando, sen nutraĵo !

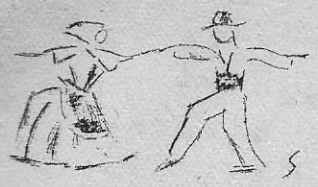
Vi, legantoj, nun povas, ĉu ili estas feliĉaj aŭ ne?

Fino



この町の美しさは幾重にも起伏する街路の間に美しいビルデングや、色彩はなやかに塗られた家々が一望の中に見られるところにある。そしてこのカーは両側に展望用のベンチもあってカリフオルニヤらしい、感じの良いカーであった。電車に腰を下ろすと、忽ち私達はしやべった。彼女は町を説明し、私がそれに相槌をうつのである。僕が質問し、彼女がそれに答えるのである。すると乗客の耳と目が私達の方をむいた。再び「この紳士は日本人で……私達はエスペラントで……」とやるのである。全く恐れ入ったことである。僕は初舞台をふんだように赤くなるが、彼女は意に介しない。最も愉快なエスペラント・プロパガンドである。市内を歩いて、此を十ぺん近くも繰返したであろうか。支那人街で私達は降りた。ここはシンガポールと同じように支那人の家が並んでいる。私達は二三の店に入って物色したが、日本製品が意外に多いのに驚いた。陶器類は大低日本品である。民藝品のよいものは一つもなし、いかにもアメリカ人向きの、きれいに彩色された工業製品（日本陶器）が多かった。陶器についでこけしやその他の日本特産品もあったが、それらについて今度は僕が幾分の説明をした。支那人街から銀行の多いコロンブスストリートに下り、私達は歩きながら銀行の建物を観察した。ウオルフさんはその大理石のファウンドメントを指して、"Marblo" といった。"tio ĉi montras usonan riĉon!" (これがアメリカの富をなす) それから私達はその銀行の一つの中に舞い込んだ。私達が手を触れずともドアは自然にあき、私達が入るとドアは自然に閉った。クリスマスデコレーションに輝く、天井、廊下、中央のクリスマス・トリー、年末を前にしてやゝ忙しそうな事務所、客も相当多数あった。いかめしい守衛がいたが、彼女が「彼は日本の……エスペラントで……」というと相好をくずした。次の銀行にも私達は入った。やはりクリスマスデコレーションはあったがひっそりしている。私達は丁度現れたエレベーターの中に入った。エレベーターガールが何階かときくとすぐにウオルフさんは「彼は日本から昨日……エスペラントで……」という。そして私達はエレベーターガールの好意で一番高い（15階）ところまでゆき、そこでしばらく市内を見下ろすことが出来た。二つの壁の間に並び立つ多くのビルデング、小さな蟻のような人間達、逆光がさんさんと降りそそいであざやかな空の色がそれらと明らかな区別をなしていた。再び歩いてポストストリートの店にわたって歩いた。ウオルフさんは妹さんの為に楽器屋に寄ったが、それから僕の要望によってデパートに案内してくれた。それは日本のデパート程大きくはなかった（4階）が店内はきれいに飾られて（特にクリスマスセールのためと思えず）殊に客に対する設備がよかった。エレベーター、エスカレーターはもとより、喫煙室、休憩室も快よく出来ていた。一階はクリスマスを前にしての土曜日で相当な混雑振りであった。入口のドアの傍に恤兵資金を集める女学生が鈴をならし"聖夜"—Holly Night を歌っていて、ウオルフさんがいくらかを箱に入れた。それからウオルフさんは Yellow car（ハイヤー）を呼びとめた。「公園に行きませう」、人混みの市街から離れて、私達の自動車は大きな静かなビルデングの傍を通った。ふとウオルフさんは運転手に道が違っていると詰問した。すると運転手が、ストレンヂャーにオペラ座と市役所をみせると答えた。私はそれを見た。さほどに大きな市役所でもなかったが、片前にやゝ広い庭と噴水があった。オペラ座にはその夜音楽会があるとのことであったが、そのたてものは決してぜいたくなものではなく、むしろ堅実のような感じであったし、その周囲はひっそりとしていた。私達の自動車はフエルストリートを真直ぐゴールデン・ゲート・パーク（金門橋公園）に入ってゆく。久しぶりの緑が僕の目をたのしませる。常緑の葉が真昼の太陽にきらめき、僕は bele verda! と叫ばざるを得なかった。その他の木々も日本の常緑樹によく似ていた。そして僕はそれらについても話しかける。ウオルフさんが突然運転手に

→P.20



合成語の単語化

el mia babilado

千葉 三郎

小学一年生の子供に 1+2 は？ と問えば、指で数えて3と答える。これは小学生の算数であるが、この3といふ答は新しい飛躍えの新しい形である。

これとエス語の合成語とはその意味が違ふかも知れない。然し飛躍した新しい形では全く同じである。 エス語の合成は皆様ご存知のように一つの語根を知ることによって色々な新らしい形の、然も意味の違った言葉を造ることが出来る。こういふことは外国語ではどうなってゐるか知識が全然ないので引用することが出来ないが、日本語について言えば、このエス語の合成と同様のことが言える。つまり漢字の結合である。

鉄＋道 ＝ 鉄道　鉄＋筆 ＝ 鉄筆　鉄＋管 ＝ 鉄管

石＋筆 ＝ 石筆　石＋炭 ＝ 石炭　石＋油 ＝ 石油　等々である。

しかしこれらの語は合成語として教えられてきたのではなく、一つの単語として教えられてきたのである。従って、その点エス語の合成語とは意味が違うがその形は全く同じである。

さて、エス語では先に述べたように、一つの語根を知れば数多の言葉を造れることは皆様ご存知の通りで、例えば；

語根 ven'（来る）に対し

re ＋ veni＋i ＝ reveni （帰る）

al ＋ ven＋i ＝ alveni （来させる）

bon＋ ven＋i ＝ bonveni（ようこそ）

語根 manĝ（食ふ）に対し

maten ＋ manĝ ＋ o ＝ matenmanĝo （朝食）

taĝ ＋ manĝ ＋ o ＝ tagmanĝo （晝食）

manĝ ＋ aĵ ＋ o ＝ manĝaĵo （食物）

こうした合成によって吾々はエス語学習上単語の記憶が非常に軽減されるといふことを教えられて来た。 然し吾々はここで考えさせられることは、總ての合成語も、その合成された語そのものが、しばしば反覆されて使用されてくるとき、その語はもはや、合成語といふ観念からはなれて、それは一つの独立した単語として人々に受入れられることである。例えば吾々の日常いふところの Esperanto といふ語もその一つで、今日それを合成語として Esper ＋ ant ＋ o といふ語の成立などと考えることなく、それは単にエスペラント（それが希望しつゝある者といふ意味より）といふそれ自体独立した語として観念し、その意味で人々が受取ってゐることである。 このように使用の道程に於て今日それが合成語より成立ったものでありながら既に単語化したものは恐らく数知れずあることであろう。

samideano (同志)　estimata (尊敬する)　komencanto (初等者)
socialismo (社会主義)　japanujo (日本)

以上一部をあげてみたが、もしせんさくすれば数多くあげることが出来る。殊に国名などは一つの単語と考えて受入れた方がハンサがなくて有利ではないかと思われる。　このようにどの語でもそれが社会の進化発展に従って反覆繰返されるとき、それは既に合成語によるといふより単語化した一つの語として人々の間で消化されてゆくであろうといふことである。例えば日本人が今日、ナイフやステッキ、トラック又はジープなど、それが何等外国語であるという観念にとらはれず日本語として完全に消化してゐるのと全く同様である。

このような見解からいってエス語の合成化は社会の進化発展に従って、それが段々せばめられてゆくことが一応感じられて来ることである。勿論逆に社会の発展により新らしい言葉が生れ、合成語が必要となって来ることも考えられる。　例えばatombombo (原子爆弾) のようなものである。然し、そうした新らしい合成語より単語化してゆく語の方が比較的に多いのではあるまいか。結局、エス語の合成化は将来に於てそれは独立した単語として受入れられることであって、それは又民族語の単語と同一の歩調をとらねばならぬのではないかと、かく考えてみたのである。

(1953. 1. 28)

ROKO "ĈARANKE"

Sur marbordo inter Date-maĉi kaj Abuta-maĉi en suda parto de ĉi Hokkaido, kuŝas roko nomata "Ĉaranke", kiu signifas "diskuton aŭ disputon en aina lingvo. Kial oni nomis ĝin tiel? Antaŭ longa longa tempo, mirinde al la bordo, albordiĝis granda baleno. Jen komenciĝis vigla disputo inter ainoj de la du vilaĝetoj por gajni la balenon.

La disputo estis daŭrigita tra tri tagoj. Finfine ainoj de Date venkis alian, kaj gajnis la balenon.

Sed, ho ve! Tuj kiam la disputo finiĝis, ĉiuj disputantoj ŝanĝiĝis ŝtonoj nur unu momenton.

Ĉu dio koleriĝis la avaran interdisputon? Ial, ĉi "Ĉaranke", figuras du pozojn; unu — imponanto, alia — genuanto.

(el Hokkaido-Ŝimbun 22. Feb. 1953)

Murmuro en iu tago

F-ino
Yasuko, Kayama

III Virino kaj Feliĉo

—Por mia saĝa kaj sincera amikino—

Iu penso atakis min, kiam mi estis promenanta parkon kun ruĝiĝintaj folioj. Tio estis virina feliĉo. Mi ofte trovas tian priskribon en ĵurnaloj aŭ gazetoj. Mi pensas, kial oni traktas precipe pri virina feliĉo, kaj tio estas nur pri virina feliĉo sed ne pri homa feliĉo. Kaj kunekzisto de ĉi du feliĉoj estas tiel malfacila, kiel la problemo pri du virinvivoj, en ofico kaj hejmo.

Kiam unu talentoplena virino ekpensas pen labori por socio kun sia kapablo, kaj ŝi deziros la feliĉon kiel homo en tia vivo, unu fojon ŝi devos pensi forlason de sia feliĉo kiel virino. Ĉiuj virinoj havas grandan amon kiel ĉiuj viroj havas grandan ambicion. En la verkoj aŭ la laboroj de tiuj virinoj, kiuj forlasis virinan feliĉon por popolamaso aŭ por sia deziro, mi trovis ilian grandan amon, samtempe havas iometan malĝojn pro ke ili ja estas virino. Mine ŝatas tiujn vortojn, surmetitajn "virino—", ĉar el la vortoj, mi sentas "virinon kontraŭ homo", kaj tio estas nek virino el homaro, nek kontraŭ viro. La kusitan ideon, ------- homo estas viro, sed virino nur estas virino mem -------, mi sentas en d versaj vortoj aŭ aferoj de socio. Pri la kialo, mi pensas ; jen.

La homsocio estas posedata de viro, kaj virino estas nur objektiva ekzistaĵo; ĝuste pro tio!

Ŝajnas al mi, ke certe virino estas malpli supera ol viro kiel homo, tamen objektiviĝi virinon por mi estas malĝoje. Post milito, ni virino gajnis egalecon en leĝo, kaj ni fariĝis virino kiel homo, kaj al mi ŝajnas, ke virino jam ne estas fariĝanta virino kontraŭ homo.

IV. Feliĉo kaj Sinmortigo

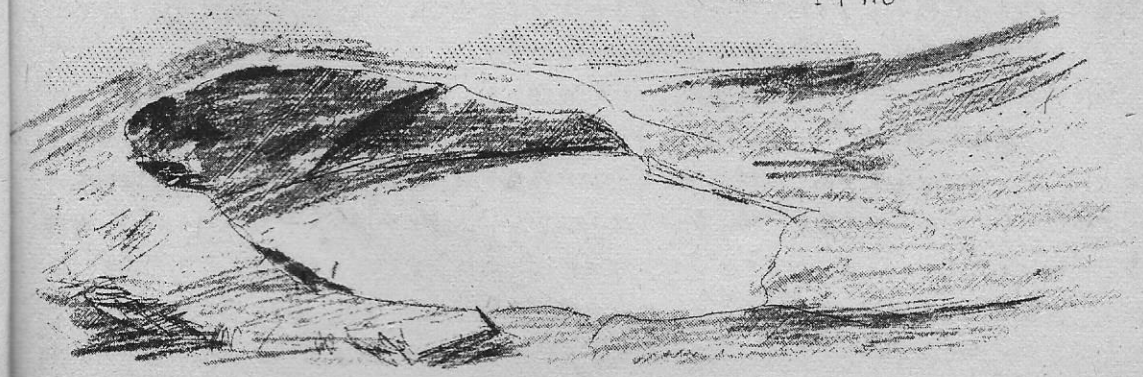
Tiu ĉi temo estas preskaŭ sama al N-ro 1. Oni diras pri feliĉo, ke tio estas problemo de mia subjektivo, ankaŭ mi pensas tiel, sed mi deziras kredi ekziston de objektiva feliĉo, ĉar la feliĉo en nia koro estas tro malklara kaj abstrakta. Ekzemple, tie ĉi estas nutroplena kaj artefarita kuiraĵo, kaj plej multaj dirus "Kiel bongusta ĉi tiu kuiraĵo estas!" Kaj aliaj mal multaj dirus grimante "Kiel malbongusta! Mi ne ŝatas!" Oni ne diras, ke gustosento estas problemo de subjektivo. Generale, kunekzistas ambaŭ du manĝaĵoj bongusta kaj malbongusta en nia socio, kaj la feliĉo, pri kio mi deziras diri, estas tia feliĉo. Ĉi tie mi supozas unu homon, kiu estas favorata de tuta materia kaj objektiva feliĉo, kompreneble multe da libertempo. Eble li rigardos sin mem pro ekscesaj horoj, kiel mi diris antaŭe. Tro sinrigardi estas malfeliĉe, nome, generale introspektaj homoj estas malfeliĉaj.

Malfeliĉo de malsanulo estas kaŭzita de tio, kio estas devigata de sia malsano. Kaj li havas liberon, riĉaĵon kaj sanon, pro tio, li ne havas eksteran rezonon, per kiu konsolas sin aŭ transformigas sian respondecon.

Ofte oni diras pri sia senkapableco "Tio estas pro manko de tempo aŭ mono", sed ĉi kompatinda homo devas fronti rekte al sia senkapableco, plie li ne povas konscii klare sian feliĉon. Ni bezonas iom da malfeliĉo (nome, t.e. iomete da malriĉeco aŭ malliberecо) por konscii kore nian veran feliĉon, same kiel malsanuloj sciias plejbone la grandan valoron de bonsano.

Ĉe la fino, mi pensas, ke feliĉo estas varmobedo de malesperego kaj malesperego estas fonto de sinmortigo.

— Fino —



「私達はエスペラントでしゃべっているが エスペラントはきれいに聞こえるか」と聞いた。運転手は「そうです。けれども私には理解できませんでしてね」と答える。それからウオルフさんは私達の会話について、僕のおしゃべりについて議論をしてくれた。上り下りがあり、カーブがあり、そして若い人達がボートを漕いでいる池の廻りをめぐって再びとって返し、支那風の家の前でとまった。支那式の門があり私達はそれを潜ってその家の中に入る。あづまやに似た支那人の茶屋があって、子供を連れた女のお客が腰を下ろしていた。ウオルフさんはお茶と菓子を注文した。日本で見たことのある煎餅菓子と支那茶が出た。支那茶の味には野草のにおいがある。煎餅をわるとおみくじがでてきた。ウオルフさんは〝待人来る〟で、僕のは〝少年時代における如く幸福ならん〟である。どうやら当っていたようだ。静かな公園ののどかさ、人になれたリスが私達の前にたっと煎餅をもとめた。ウオルフさんがそこにいた小供に「How do you do」と挨拶しなさいよ」というと、その小供はいわれるとおりに何度も〝How do you do〟をいった。リスはびっくりして小供の顔をみつめていた。庭には椿や、つつじもあった。太鼓橋や五重の塔も、ブロントの佛像もあった。昔は日本の庭園もこの近くにあったのだという。私達はその庭のすぐ隣り De Young Museum に入る。ウオルフさんが午後には妹に用事があるというのでゆっくり全部を見る時間がなかったが、カリフオルニヤ水彩画会の展覧会や現代アブストラクト絵画の小品展、古典絵画展、名を忘れたが数年前ニューズ映画に出た有名な女の人の個展等をみた。アブストラクトではすでに最近日本でも公開されている画家（此も名前を忘れた）の絵もニ、三あった。古典絵画はすばらしいものであった。ルーベンスの The trifute monej やゴーィエンの The thunderstorm など特に印象に残っている。明日からはレオナルド・ダ・ビンチ展があるとの事であった。　私達は再び歩き始めた。樹木の高く生い茂る道の両側にたくさんのブロンド像が並んでいた。その一つ一つを彼女にたづねることはむづかしかったが、突然 Jene!（ほら、ここに）と彼女が叫んだ。Selvantes!(セルバンテス）左側の葉の蔭に高く、によっきり大きな顔！まぎれもない！そして、ドン・キホーテが膝を折りまげて彼に辞儀をしていた。何故セルバンテスの像がこのようなところにあるか尋ねたら、この市の開発者はスペイン人であるという。即ち、170年前にスペインの一伝道者が立てた小さな村が、今やこのような大きな近代的都市になっているとのことである。公園を出て、私達は再びフルトン・ストリートを、そして青いバスに乗って、ウオルフさんの家に向った。乗車中にウオルフさんが〝O, F-ino Marshall!〟というので振り向いたら、ウオルフさんと同年輩の小柄なお婆さんが立ってにこにこしていた。〝Bonan tagon〟とその人はいった。ウオルフさんが僕を紹介してくれ、僕はこの人がエスペラン手紙トで、バハイ教の信者L.J. マーシャル嬢であることを知って急いで〝Bonan tagon〟と挨拶をした。けれどもこの人はすぐに降車しなければならず、握手だけで下車していった。バハイ教についてウオルフさんが説明してくれたけれども十分に理解出来なかった。

家に帰った時、再びエスペラント運動について質問した。ウオルフさんは毎季毎に講習をひらくのだが、集まる人は少く、十分にエスペラントで話し得る人もウオルフさん一人だそうである。Sola というウオルフさんの表現は僕にも心から賛成され、サンフランシスコのエス運動を一人で推進しているこの人に敬意を捧げる。（オークランドにはエスペランチストが多い）受講者の中に日本人二世、熊本ユキオ氏がいた。ウオルフさんは、すぐこの家に来るよう電話をかけた。まもなく、玄関のベルが聞えると、彼女は急いで「Bonan tagon を日本語でなんというか」ときくから、「今日は」と僕は教えたら彼女はいそいそと玄関に出て「コンニチワ」といった。

40年輩、しかし服装からして非常に若く見える熊本氏が元気よく入ってきた。熊本氏は、中学は広島二中を出て1930年にアメリカに帰ってきているのだから日本語は全く自由で、そのために今日本領事館につとめて居られるのだそうである。けれども氏はエスペラントは話せないので、三人の間に英語とエスペラントと英語が錯綜した。妙な感じである。ともかく僕は氏の家にゆくことになった。

Ĝis revido, Good bye, とウオルフ姉妹に別れをつげて僕は熊本氏の車に乗る。それから私達は全く日本語で話す。エスペラントで話さないので張合がなかったが、氏の室の長椅子に腰を下ろし英語を話す子供達と一緒にテレビィを見ていると、僕はアメリカともつかず、日本ともつかぬとんでもないところにぼんやり坐っているような妙な感じに打たれた。氏の奥さんとお嬢さんが帰って来た。奥さんも日本の女学校を出て居り日本語で話す。ビールをのみ、それから自動車を駆して支那町に行った。

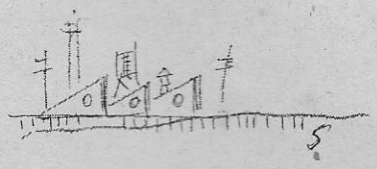
東洋人、白人、黒人の右往左往する繁華街、熊本さんは相当たくさんの知巳がこの町にあるらしく、二三の店では挨拶した。日本語で話す若い女がいたが支那人であるという。聞けば、かって日本人商店も相当数この町にあったのだが、戦争中に安値で支那人に売り捌い、今は寥々たるものであるという。私達は支那食堂「桃園」に入る。料理の名は知らぬが肉をいろいろに細工した上等の料理に舌鼓を打った。

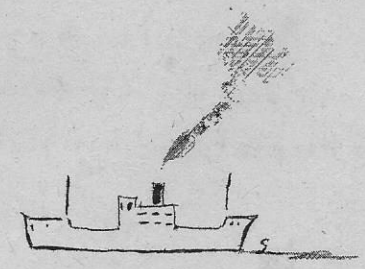
暗くなった街路にはネオンが輝いている。熊本さんが2300ドルもの全財産をあげて買ったという1951年型(名を忘れた)には全くすべるようにして長い道を走った。遠く埠頭に日本郵船のアアネル マークを見たとき、家に帰ったような安心感と夢からさめた虚脱感とを感じた。

船に帰ったとき、一応船内を案内し、それから私達を招じ入れた機関長の室に入った。幸い機関長も広島県人で熊本さんと話があってよかった。いろいろの話の中で、私達はアメリカ人の生活について知ることが出来た。物価は私が感じたように高い、床屋などは刈るだけで1ドル50セント。日本みたいに顔をそり、頭を洗おうものなら5ドルもとられるという。15才以下2人の子供のある4人ぐらしで最低350ドルを要するだろうということであった。又、日本趣味が流行をよんで盆栽趣味は特に著しいものがあるという。

夜、僕は数々の幻想にふけった。夢のような一日を思い出した。さみしい独身生活を続けながらも、熱情的にエスペラントを普及しようとするウオルフさんの町での表情が何度も何度もあらわれた。エスペラントが醸すピンク色の霧のサンフランシスコの街の中で、僕はたしかにしっくりと幸福感に酔っていたのであった。

(1952年12月14日)





Historio de Unu Patrino

el Fabeloj de Andersen

ZAMENHOF 訳
F.S.G. 訳　　三訳対照
大畑 訳

花園凡太郎

Zamenhof 訳

"Mi havas nenion plu por doni!" diris la malĝoja patrino, "sed mi iros por vi ĝis la fino de la mondo."

"Tie mi havas nenion por fari," respondis la virino, sed vi povas doni al mi viajn longajn nigrajn harojn; vi certe ja mem scias, ke ili estas belaj, kaj ili plaĉas al mi. Anstataŭ tio vi ricevos miajn blankajn harojn, kaj tio ja ankaŭ io estas!"

"Ĉu vi nenion plu postulas?" ŝi diris; "tion mi donos al vi kun ĝojo!" kaj ŝi donis al la virino siajn belajn nigrajn harojn kaj ricevis anstataŭ tio la neĝblankajn harojn de la maljunulino.

F.Skeel-Giörling 訳 ——

"Mi ne posedas ion por fordoni," diris la malĝoja patrino, "sed mi estas preta ili por vi ĝis la fino de l' mondo."

"Bone, sed tie mi havas nenion por fari," diris la sarkistino; "donu al mi viajn longajn, nigrajn harpletojn; vi mem certe scias, ke ili estas belaj! Rekompence vi ricevos miajn blankajn, estas almenaŭ io!"

"Se vi postulas nur tion de mi," ŝi diris, "mi ĝin fordonas kun ĝojo!" kaj ŝi donis al la sarkistino siajn belajn, nigrajn harpletojn kaj ricevis interŝanĝe la blankajn de la maljunulino.

大畑訳 ——

「もうなんにも、あげるものはありません。」と悲しみのお母さんは言いました。「けれども、あなたのお言いつけなら、世界の果までも参ります。」

「そんな所に、わたしや何の用もないよ！」と婆さんは言いました。「それよりか、お前さんのその長い黒髪をくれればいいぢやないか。自分だってその美しさを知っておいでだろう。それが、わたしはほしいのさ！ そのかわりお前さんには、わたしの白髪をあげるとしようよ。これだって無いよりはましだよ！」

「そのほかにお望みのものがないなら」とお母さんは言いました。「喜んでさしあげましょう！」こう言ってお母さんは、美しい髪の毛をやって、そのかわりに、婆さんの雪のような白い髪の毛をもらいました。

Zamenhof 訳 —

Post tio ili iris en la grandan florvarmejon de la Morto, kie en stranga maniero kreskis floroj kaj arboj. Jen sub vitraj kloŝoj staris delikataj hiacintoj kaj grandaj arbosimilaj peonioj; jen kreskis akvaj kreskaĵoj, unuj estis freŝaj, aliaj duonvelkintaj, akvaj serpentoj kuŝis sur ili, kaj nigraj kankroj forte alkroĉiĝis al la trunko. Jen staris belegaj palmoj, kverkoj kaj platanoj, jen petroselo kaj florante timiano; ĉiu arbo kaj ĉiu floro havis apartan nomon, ĉiu estis homa vivo, la homo ankoraŭ vivis, unu en Ĥinujo, alia en Grenlando, sur la tuta tero ĉirkaŭe. Jen estis grandaj arboj en malgrandaj potoj, tiel ke ili staris kripligite kaj preskaŭ krevigis la portojn; sur alia loko oni vidis malgrandan delikatan floron en grasa tero, ĉiuflanke kovritan de musko kaj bone vartatan. La malĝoja patrino klinis sin super la plej malgrandajn kreskaĵojn kaj aŭskultis, kiel en ili batas la homa koro, kaj inter milionoj ŝi rekonis la koron de sia infano.

F. Skeel-Giörling 訳 —

Tiam ili iris en la grandan florejon de l' Morto, kie floroj kaj arboj strange interkreskis. Belaj hiacintoj staris sub vitroklosoj, kaj grandaj, fortegaj peonioj; oni vidis akvokreskaĵojn; unuj estis tute freŝaj, aliaj aspektis malsanete; limakoj rampis sur la folioj, kaj nigraj kankroj ĉirkaŭpremis la trunketojn; kreskis ankaŭ belegaj parmarboj, kverkoj kaj platanoj, kaj plie petroselo kaj floranta timiano; ĉiu arbo, ĉiu floro havis sian nomon, ĉiu estis la vivo de iu homo; la homo ankoraŭ estis

vivanta, unue en Ĥinujo, alia en Grenlando, dise en ĉiuj lokoj de la mondo. Troviĝis altaj arboj kreskantaj en kuvoj malgrandaj; ili aspektis tute premitaj kaj estis pretaj por kreviĝi la kuvon; ankaŭ en multe da aliaj lokoj staris malsanaj floretoj en grasa tero, kun musko ĉirkaŭ kaj dorlote flegitaj. Sed la malgaja patrino kliniĝis super ĉiu el la plej malgrandaj kreskaĵoj, kaj ŝi aŭdis, kiel frapas la homa koro interne de ili. Fine, fine, el milionoj da kreskaĵetoj ŝi rekonis la koron de sia infaneto.

大畑訳 —

それから、二人は、死神の大きな温室の中へはいりました。そこは花や木が、お互いに入りまじって茂っていて、不思議な光景を見せていました。やさしいヒヤシンスが、鐘の形をしたガラスの蓋の下で大事にされていました。そうかと思うと、こちらには大きな鉢そうなばたんが立っていました。水草も生えていました。その中には生き生きとしているのもありましたし、半分病気になっているのもありました。それは、その上に水蛇がとぐろを巻いていたり、黒いぎりがにが茎にしがみついていたりしているからでした。そこにはまた、立派なしゅろの木や、かしわの木やすずかけの木が立っていました。またおらんだぜりや、花盛りのじゃこう草もありました。どの木も、どの木も、それぞれ自分の名前を持っていました。その一つ一つは人の命を表わしていました。そして、これらの人達はまだ生きていて、一人は支那に、一人はグリーンランドに、という風に世界中に散らばって住んでいるのでした。大きな木が小さい鉢の中に、窮屈そうに立っているのもありました。もう少しで鉢がくだけそうです。また、あちこちには、小さな弱々しい花が、肥えた土に植えられて、まわりを苔でつつまれ、大事にされていました。悲しみのお母さんは、その中でも一番小さい草に、いちいち身をこごめて、その中で人間の心臓が脈を打っている音に耳をかたむけました。こうして、数かぎりなくあるうちから、とうとう自分の子供の心臓をききわけました。

Zamenhof 訳 — —

"Ĉi tio ĝi estas!" ŝi ekkriis kaj etendis la manon super malgrandan bluan krokuson, kiu tute velke kliniĝis sur unu flankon.

"Ne ektuŝu la floron!" avertis la maljuna virino, "sed stariĝu ĉi tie, kaj kiam la Morto, kiun mi jam delonge atendas alvenos, tiam ne lasu lin elŝiri la kreskaĵon. Minacu al li, ke vi faros tion saman al la aliaj kreskaĵoj, tiam li fariĝos zorga. Li estas responda antaŭ Dio, ke sen Lia permeso neniu kreskaĵo estos elŝirita."

F. Skeel – Giörling 訳 –

"Jen ĝi estas!" ŝi kriis, etendante la manon super flua krokuseto, kiu tute kurbiĝis kontraŭa tero, malsanete kaj lace.

"Ne tuŝu la floron!" diris la sarkistino, "sed atendu ĉi tie, kaj kiam la Morto venos, vi zorgu, ke ĝi ne forŝiru la kreskaĵon; minacu ĝin, ke vi forŝiros la aliajn florojn, tiam ĝi ektimos; ĝi havas respondecon antaŭ Dio pri ili; neniu el ili povas esti forŝirata sen la permeso de Dio!"

大畑 訳 ——

「これです！」お母さんはこう叫んで、青い花の咲いている小さなサフランの方に手をのばしました。その花はすっかり衰えてしまって片方にうなだれていました。

「花にさわっちゃいけないよ！」と婆さんは言いました。「そこに立っていなさい。おっつけ死神が来なさるじぶんだからね、そうしたら、その草を引き抜かせないようにするんだよ。お前さんの方から、ほかの花にも同じ目に合はせてやるからと、おどかしてごらん。そうすりゃ、死神も困んなさるだろう！それというのはね、天の神様のお許しがある前は、たとえ草一本でも引き抜かないという堅い約束があるからさ。」

Zamenhof 訳 ——

Subite tra la ĉambrego ekflugis glacie malvarma blovo, kaj la blinda patrino povis kompreni, ke la Morto alproksimiĝas.

"Kiel vi povis trovi la vojon ĉi tien?" li demandis, "kiel vi povis alveni pli rapide ol mi?"

"Mi estas patrino!" ŝi respondis.

Kaj la Morto etendis sian longan manon al la malgranda delikata floro, sed ŝi tenis super ĝi, forte ŝirmante, siajn manojn, tute super ĝi kaj tamen plena de timo, ke eble ektuŝos unue el la folietoj. Tiam la Morto ekblovis sur siajn manojn, kaj ŝi sentis, ke lia spiro estas pli malvarma ol la malvarma vento, kaj siaj manoj senforte malleviĝis.

F. Skeel – Giörling 訳 ——

Subite glacia vento trablovis la gardenon, kaj la blinda patrino sentis, ke estas la Morto, kiu venas.

"Kiamaniere vi povis trovi la vojon ĉi tien ?" ĝi demandis, "kiel vi povis alveni pli rapide ol mi ?"

"Mi estas patrino !" ŝi diris. Kaj la Morto etendis sian longan brakon kontraŭ la malsaneta floreto, sed ŝi temis siajn manojn ĉirkaŭ ĝi, tiel firme, kaj tamen zorg-ante por ne ektuŝi la florojn. Sed la Morto blovis sur siaj manoj. kaj ŝi sentis, ke estas akre, pli akre ol la plej mallvarma vento, kaj senforte ŝiaj manoj subfalis.

大畑 訳 ——

その時、急に氷のような冷たさが、ざあっ！ と広間を通りました。目の見えないお母さんにも、死神が近づいて来たことが分りました。

「どうしてお前は、ここへ来る道がわかったのか？」と死神はたづねました。「どうして、このわしよりも早く来られたのか？」

「私は母親でございますもの！」とお母さんは言いました。

死神は長い手を小さいかよわい花の方へのばしました。お母さんは自分の両手をしっかりと花のまわりに巻きつけて、すき間のないようにかばいました。そして、もしや花びらの一枚にでも死神がさわりはしないかと、それはそれは心配していました。すると、死神はお母さんの手に息を吹きかけました。その息は冷たい風よりも、もっと冷たく、まるで氷のようでした。お母さんの手は、しびれてぐったりと垂れてしまいました。

Zamenhof 訳 ——

"Vi nenion povas fari kontraŭ mi !" diris la Morto.

"Sed Dio povas !" ŝi respondis.

"Mi faras nun tion, kion Li volas !" diris la Morto. "Mi estas Lia ĝardenisto. Mi prenas ĉiujn Liajn florojn kaj arbojn kaj transplantas ilin en la grandan ĝardenon de la paradizo, en la nekonatan landon, sed kiel ili tie kreskas kaj kiel tie estas, tion mine havas la rajton diri al vi !"

"Redonu al mi mian infanon !" diris la patrino kaj ploris kaj petis. Sed subite ŝi ekkaptis per ambaŭ manoj du belajn florojn ĉe sia flanko kaj ekkriis al la Morto: "Mi elŝiros ĉiujn viajn florojn, ĉar mi estas en malespero !"

F. Skeel — Giörling 訳 ——

"Vi ne povas ion fari kontraŭ mi!" diris la Morto.

—"Sed la bona Dio povas!" ŝi respondis.

"Mi nur plenumas Lian volon!" diris la Morto. "Mi estas Lia ĝardenisto! Mi prenas ĉiujn Liajn florojn kaj arbojn kaj replantas ilin en la ĝardenon de l' Paradizo, en la nekonata lando, sed kiel ili tie kreskas, kaj kio ili fariĝos, mi ne povas rakonti!"

"Redonu al mi mian infaneton!" diris la patrino, kaj ŝi ploris kaj petegis; sed subite per ĉiu mano ŝi ekkaptis du belajn floretojn, kiuj kreskis en la proksimeco, kaj ŝi kriis al la Morto: "Mi forŝiros ĉiujn viajn florojn, ĉar mia koro malesperas!"

大畑 訳 ——

「わしに向って何をしようとだめだぞ！」と死神は言いました。

「けれども、神様はお出来になります！」とお母さんは言いました。

「その神様の思召を、わしはしているのぢや！」と死神は言いました。「わしは神様の庭造りぢや。わしは、神様の花や木を一つ一つ運んでは、それを誰も知らない国にあるパラダイスの大きな花園に植えかえるのだ。そこでそれ等がどんなに大きくなって茂っているか、またそこがどんな所だか、それをお前に言うわけにはいかないが。」

「どうぞ、私の子供を返して下さい！」とお母さんは、涙を流して幾度もたのみました。と、いきなり、お母さんは、そばにあった美しい花を両手に一つづつ掴みました。そして、死神に向って叫びました。「あなたの花を、みんな引き抜いてしまいます！ もう、どうなったって、かまうもんですか！」

Zamenhof 訳 ——

"Ne ektuŝu ilin!" ekkriis la Morto. "Vi diras, ke vi estas malfeliĉa; kaj nun vi alian patrinon volas fari tiel same malfeliĉa!"

"Alian patrinon!" diris la kompatinda virino tuj ellasis la florojn.

F. Skeel — Giörling 訳 ——

"Ne tuŝetu ilin!" diris la Morto. "Vi diras, ke vi estas malfeliĉa, kaj nun vi volas, ke alia patrino fariĝu egale malfeliĉa kiel vi!"

"Alia patrino!" ŝi diris, lasante la floroj en la sama momento.

大畑 訳 ——

「それにさわることはならん！」と死神は言いました。「お前は、自分の不幸をなげいているそばから、今また、よその母親をも同じ不幸に落そうとしているのだぞ！——」

「よその母親をですって！」哀れなお母さんはこう云ったかと思うと、すぐ両方の花をはなしてしまいました。

Zamenhof 訳 ——

"Jen mi donas al vi viajn okulojn!" diris la Morto; "mi elkaptis ilin el la lago, ili lumis tiel brile. Mi ne sciis, ke ili estas viaj. Prenu ilin returne, ili nun estas pli klaraj ol antaŭe; rigardu per ili en la profundan puton ne mal proksime de vi. Mi diros al vi la nomojn de la du floroj, kiujn vi volis elŝiri, kaj vi vidos ilian tutan estontecon, ilian tutan homan vivon, vi vidos, kion vi volis detrui kaj neniig!"

Kaj ŝi ekrigardis en la puton. Feliĉega ĝojo plenigis ŝin, kiam ŝi vidis, kiel unu el ili fariĝis beno por la mondo, kiam ŝi vidis, kiom multe da feliĉo kaj ĝojo eliros el li. Ŝi vidis la vivon de la alia, tie estos ĉeno de zorgoj kaj suferoj, mizero kaj malfeliĉo.

"Ambaŭ estas la volo de Dio!" diris la Morto.

"Kiu el ili estas la floro de la malfeliĉo kaj kiu estas la floro de la beno?" ŝi demandis.

"Tion mi ne diros al vi!" diris la Morto, "sed almenaŭ tion sciu, ke unu el tiuj floroj estis la floro de via propra infano, ĝi estis la sorto de via infano, kion vi vidis, la estonteco de via propra infano."

F. Skeel-Giörling 訳 —

"Jen estas viaj okuloj!" diris la Morto, "Mi trovis ilin en la lago, ili tiel bele brilis; mi ne sciis, ke estas la viaj, reprenu ilin ili estas ankoraŭ pli brilaj ol antaŭe. Rigardu nun en la profundan puton tie; mi diros

al vi la nomojn de la du floroj, kiujn vi volis forŝiri, kaj vi vidos ilian tutan estontecon, ilian homan vivon ; vi vidos kion vi volis detrui !"

Ŝi rigardis en la puton, kaj ŝi sentis sincera feliĉon, ĉar ŝi vidis, kiel la vivo de unu el ili fariĝas granda beno al la mondo ; ho! kia feliĉo kaj ĝojo! Kaj ŝi vidis la vivon de l'alia ; ĝi estas plena je mizero, dolcro kaj teruro.

"Ambaŭ sortoj estas laŭ la volo de Dio !" diris la Morto.

"Kiu el ili estas la floro de l'mizero, kaj kiu estas tiu de l'feliĉo ?" ŝi demandis.

"Tion mi ne diras !" respondis la Morto "sed unu el ili estis la floro de via propra infaneto; la sorton, la estontecon de via infaneto vi vidis !"

大畑 訳 ——

「さあ、このお前の眼を受け取りなさい。」と死神は言いました。「わしはそれを湖からすくいあげてきたのだ。たいへんよく光っていたのでのう。まさかお前の眼とは知らなんだ。さあ、取りもどすがよいぞ。前よりも、ずっと明るくなっている。それでもって、お前のそばにある深い井戸をのぞいて見なさい。お前がいま引き抜こうとしたこの二つの花の名を呼んでやるから、その花の行末と、その人間の一生とを見るがよいぞ！」

そこでお母さんは井戸の中をのぞいて見ました。そこには、世の中の栄えのもととなって、多くの幸福と喜びとを、まわりにひろげている一つの命が見えました。これを見たお母さんの心は、喜びに満たされました。今度は、もう一方の命を見ました。そこには悲しみと苦しみ、恐れと不幸ばかりが続いていました。

「両方共神様の思召しじゃ！」と死神は言いました。

「どちらが不幸の花ですか？ どちらが幸福の花なのですか？」とお母さんはたずねました

「それは言うまい。」と死神は言いました。「だが、そのうちの一つがお前の子供の花だということは、いますぐ分ることだ。お前が見たのは、ほかでもない、お前の子供の運命なのだ。お前の子供の将来なのだ。」

Zamenhof 訳 ——

Tiam la patrino plena de teruro ekkriis ; "Kiu el ili estis mia infano ? Diru tion al mi, liberigu la senkulpan ! Liberigu mian infanon de tiu tuta mizero ! Prefere forportu ĝin ! Portu ĝin en la regnon de Dio ! Forgesu miajn larmojn, forgesu miajn petojn kaj ĉion, kion mi diris kaj faris !

"Mi vin ne komprenas!" diris la Morto. "Ĉu vi volas havi returne vian infanon, aŭ ĉu mi iru kun ĝi tien, de kie ne ekzistas reveno?"

Tiam la patrino interplektis siajn manojn, ĵetis sin surgenue kaj preĝis al Dio: "Ne mia, sed via volo fariĝu, ĝi sola estas la plej bona! Ne aŭskultu min! Ne aŭskultu min!"

Kaj ŝi klinis sian kapon sur sian bruston.

Sed la Morto foriris kun ŝia infano en la nekonatan landon.

(LA Fino)

F. Skeel-Giörling 訳 ——

Teruriĝite la patrino kriis: "Ho, diru, kiu el ambaŭ estis mia infaneto! Forprenu ĝin nur, mi petegas! Ho, konduku ĝin en la regnon de Dio! Forgesu mian ploron, mian doloron, ĉion, kion mi faris kaj diris!"

"Mi ne vin komprenas!" diris la Morto. Ĉu vi volas, ke via infaneto revenu al vi, aŭ ĉu mi ĝin forprenu kun mi?"

Tiam la patrino kunplektis siajn manojn, kaj genuflekante ŝi preĝis al Dio:

"Ne aŭskultu min, se mi postulis ion, kio estas kontraŭ Via volo! Vi sola estas suprega kaj saĝa! Ne aŭskultu min, ne aŭskultu min!"

Kaj ŝi apogis la vizaĝon sur sia genuo, kaj la Morto kondukis la infaneton for, for en la nekonatan landon.

大畑訳 ——

これを聞いて、お母さんは恐ろしさに思はず叫びました。「どちらが私の子供なんですか、どうぞ聞かせて下さい。罪のない子を助けてやって下さい！あんな不幸な目に合はせないで下さい！あゝ、いっそのこと、つれて行って下さい！神様のお国へつれて行って下さい！私の涙なんか忘れてしまって下さい！私の願いも、それから、今まで言ったり、したりしたことを、みんな忘れて下さい！」

「お前の言うことは、わしにはよく分らん！」と死神は言いました。「お前は、自分の子供を返してもらいたいと言うのか、それとも、わしがその子を、お前の知らない遠い国へつれて行ってもよいと言うのか？」

お母さんは両手をもんで、もがき苦しんでいましたが、やがて膝まずいて、神様にお祈りをしました。「神様！　あなたのみ心にそむきますような私の祈りを、どうぞ、おきき入れ下さいますな！　あなたのみ心こそ、この上ないものでございます！　どうぞ、私のお願いは、おきき入れ下さいますな！　おきき入れ下さいますな！」

そして、母親は、頭を胸にうずめてしまいました。

死神は、母親の子供を連れて、誰も知らない国へと行ってしまいました。

（おわり）

（附記）

この「ある母親の物語」については Zamenhof 訳と F.Skeel-Giörling 訳と大畑訳との三者を掲出して、凡太郎自身の klarigo を書くつもりであったのですが、凡太郎の身辺が余りに多忙であるため、全然手をつける暇が無かったため、唯だ Z 博士、F.S.G氏のエス訳と大畑氏の邦訳とを掲せるに止まったのは、読者に対して申訳ない次第です。深くお詫申しあげます。凡太郎は目下 Andersen の Fabeloj に傾倒していますので、そのうち機会を見て Andersen の他の Fabeloj について書かして頂きたく思っています。

（1-a, Marto, 1953）

Andersen の呼び方について——

Andersen を普通わが国では、アンデルセンまたはアンダーセン（英語読み）などと呼んでいるが、デンマーク語ではこの d が silento になって、「アンネルセン」というように聞こえる。そしてこの姓は非常に多いので、必ず H.Ĉ. アンネルセン と呼ぶことになっている。なお、国名デンマークは「ダンマルク」、首府コペンハーゲンは「ケベンハウン」と呼ぶのが正しい、と大畑氏は書いておられます。

序に、我国で有名な外国人の名前の中から、六ヶしい発音のものを少し挙げて見ましょう。誰でも知ってる大音楽家の Beethoven の読み方は六ケしいようです。Siebs（ジープス）と言う学者は〔bēthōfan〕として表はしていますが、〔'be:tho;van〕とも発音されます。Siebs 氏は Cervantes を〔Serwántes〕として表はしていますが、スペイン語では v を b のように発音するそうです。「Sevilla の理髪師」を「セヴィラの理髪師」と読む人が多いけれども「セビーリャの理髪師」と読むのが正しいそうです。Siebs 氏は Cervantes の "Don Quichote" を〔dō kšiot〕として示し、新しいスペイン語では〔don kichote〕と発音するそうです。

原稿募集

◇ JAP. でなら原稿用紙に
◇ ESP. でならなるべく罫紙に
いづれも綴字をはっきり.
◇ 締切　4月30日
◇ 提出先　小樽市花口町東3の11　山賀眼科方
小樽エスペラント協会

Muĝo

HAYASAKA-Motoi.

Vi batalis kontraŭ la maljusta potenco kun varmega pasio.

Via sonĝo falis en malluman kaj profundan valon kaj tie velkis.

Malgraŭ tio vi kredis, ke homeco estas justa.

Fine vi murmuris "Estas nenia rimedo!"

Ho, kiel nobla kaj ĉagrena lamento estis!

"Adiaŭ!" multaj jaroj forpasis.

Jen venis nia generacio.

Vanajn knabotagojn ni havis.

Sed ni kreskis en la militalulkanto.

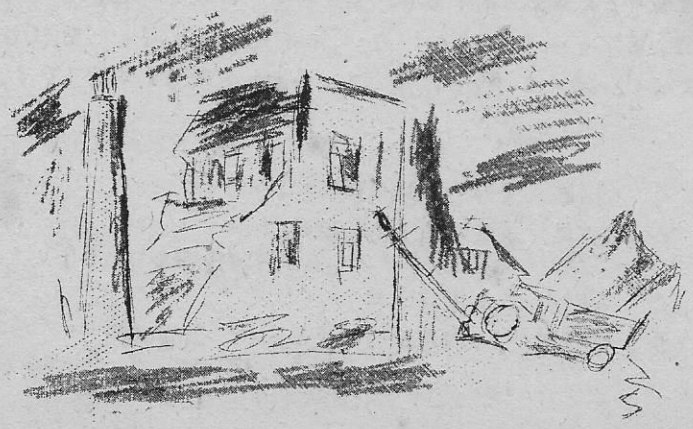
Ni ne havas eĉ kelkpecojn da eduko.

Sed niaj okuloj akre brilas kiel rabbesto.

Ni pentas, rapidas, indignas kaj muĝas.

Ho ve! Ni havas nenian vorton klarigi.

Sed certe venos la tago, kiam poeto kantos pri ni.



サッポロ だより

—過去— 札幌エスペラント協会の集まりを新らしい同志の手でもっと vigla なものにしたらということから昨年夏、人事院で Esperanta Kurso を開き、11 名の参加者を得、その中から昨年の kongreso には5名もの参加者があり、その後5〜6 名が集まって熱心に読解の研究を続けて来ましたが、現在は冬休みに入っています。

—現在— 今年になって、昨年の受講者の一人で熱心な s-ro 早坂基とアリマの協力によって fraŭlinoj のための kurso を南2西25（円山公園の一つ手前の琴似街道で下車）邦政局建築部二階部長室で毎週土曜日 13 時半から開いています。参加者、現在は三名。

—未来— この春、夏、秋にはどんどん pikniko や ekskurso を催して新旧の gesamideanoj の親睦をはかることにつとめ、また、otaruanoj や由仁の Yunianoj と合同で Ekskurso を開く計画です。どうぞ御支援をおねがいします。

（de s-ro アリマ・ヨシハル）

Ni dankas vin pro la helpmono kaj sinceraj helpvortoj al nia eta gazeto "LEONTODO".

s-ro 中沢

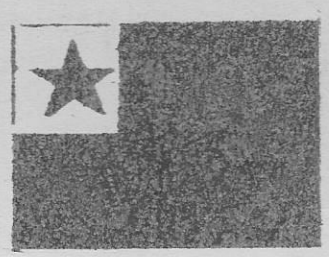
S-ro	中沢	100 jenoj
F-ino	土田	100.
S-ro	下山(定山渓)	100.
OTARU ESP-ASOCIETO		2000.
ASOCIANoj de O.E.A.		300.
S-ro	小林(新潟)	100.
S-ro	里吉(東京)	200.
S-ro	アリマ	130
S-ro	土田	150
S-ro	田中(広島)	280
S-ro	塚原(東京)	200
		3660 jenoj

尚、OTARU ESP-ASOCIETO からの 2000jenoj は 27 年度協会会費の剰餘であります。

POSTSKRIBO

Y.

第5号に集まった原稿は実に17篇であった。余白と時間がなくて収容しきれなかったので、このうちの5篇ばかりを次号にまわすことにした。創作は原則としてオミットはしない方針である。その代り、ほとんど添削もしない－なま－のものせるから、投稿される方は各自せいぜい懸命に推敲して出してもらいたい。たとえそれが日本文であろうとエスペラントであろうと、誤字などもなるべくそのまゝに掲載するつもりである。道外の声援者諸君から、内容の空虚、テクニックの幼稚、誤字、句読点の下手な打ち方（これが迷もむづかしい）など指摘されても編輯者の責任ではない。編輯者はまだ若年でエスペラントの経歴もずっと新らしいので、集まった原稿に手を入れうる程の器量はまだ無いのである。だから投稿者の不勉強で編輯者が攻撃の矢表に立たされるのは不都合であろう。もし、あなたが LEONTODO に好意をもち、この生長を希望してくれているなら、どうぞ遠慮のない率直な批判をして頂きたい。たとえばエスペラント文に文法上のあやまりが認められたなら（それが迷も多い筈と思うが）どうぞ指摘して下さい。それも、出来るだけ具体的に論理的に（理論的に？）書いてくれるのが親切と思う。



第5号は Feb. に出す筈であったのが遅れたのは S-to TAKAHASI の原稿が遅れたためである。彼のために3頁用意してたのだが、猶予期間をすぎて持ってきた原稿がなんと20枚。そのために他の5篇がはじき出された次第で何とも申訳ない。第6号には更に遺憾なき迄期すつもりである。

新潟の samideano, S-to ASAHIGA-Noboru から、LEONTODO の内容について最近こんなことを云って来た。"Tio estas domaĝo, ke ĝi ne enhavis nuntempan temon." たしかに、LEONTODO には今日の切実な問題がとりあげられていない。道外の organoj が一斉に"原爆"だの、"再軍備"だのとかまびすしいのに、LEONTODO の内容はまあなんという時代錯誤であろう、とはいうものの押しつけがましいことは言いたくない。ただ、今日の問題を LEONTODO 誌上でのべるのはタブーではない、とだけ申しあげておきたい。また、これは北海道一圏と範囲を限らず、道外からの投稿も歓迎したいと思う。

LEONTODO N-ro 5

1953年 3月 10日 発行 （隔月刊）

発行人 小樽市花園町東3丁目11番地
山賀眼科医院内
小樽エスペラント協会

編輯・印刷者 小樽市住ノ江町9丁目8番地
山本昭二郎

会費 15円（但し、地方の方は郵税8円加算）